

『在明の別』本文校訂覚書

—その二・卷二、三—

妹尾好信

【キーワード】在明の別・孤本・本文校訂・本文読解

はじめに

本稿は、前稿「『在明の別』本文校訂覚書——その一・卷一——」〔『広島大学文学部紀要』第五八巻（平成10・12）〕に引き続いて、王朝物語『在明の別』の本文読解上の基礎作業として、文意不通ないし存疑箇所に関して校訂試案を提示するものである。前回は、巻一のみを扱ったので、今回は、残る巻二と巻三を扱う。

周知の通り、『在明の別』は、天理大学附属天理図書館の所蔵になる近世中期の写本（西荘文庫旧蔵本）のみが天下の孤本として伝わっている。この本は流麗な筆跡の美本ではあるが、明らかな誤写や誤脱も多々目につき、他本校合の跡もない。物語の成立から五百年以上も隔たる後世の書写本であり、かなり損傷の多い本文を伝えられていると言わざるをえないのである。

これまで、中村忠行・曾沢太吉氏校『有明の別』上・下（『古典文庫』一三〇・一一九、昭32〜33 古典文庫）、大槻修氏著『在明

の別の研究』（昭44 桜楓社）、同『有明の別——ある男装の姫君の物語——』（『対訳日本古典新書』昭54 創英社）、市古貞次・三角洋一氏編『鎌倉時代物語集成』第一巻（昭63 笠間書院）において、それぞれ独自の本文批評に基づく校訂が加えられた翻刻本文が示された。とりわけ大槻氏の二著は、前者は総合的な注釈・研究の書、後者は一般読者向けに全訳を付した簡便な注釈書であり、性質は異なるが、ともに本物語の読解上裨益するところが極めて大きい労作である。しかしながら、それでもなお未解決の不審箇所が少なからず残されているのが現状である。本稿では、これら先学の業績の驥尾に付しつつ、本物語の読解に関してささやかな私見を提出してみたい。

前稿と同様、本文の引用は、原則として、「鎌倉時代物語集成」第一巻に拠るが、「天理図書館善本叢書」6『あさぢが露在明の別』（昭47 八木書店）の写真版を常に参照した。その他の校訂本文に拠る場合は、その旨を明記する。本文の所在の表示は、原本の丁数

と行数により、「鎌倉時代物語集成」（以下、集成本と称する）のページ数と行数も併記した。他の文献の引用に際しては、和歌は本文・歌番号とも『新編国歌大観』により、『源氏物語』以下散文作品は小学館の『新編日本古典文学全集』に拠った。傍線や傍点はすべて引用者によるものである。

卷 二

①「あけぬよのやみながらはるけんかたなかりし給なげきも、^(御)ほどなくゆきかはるとし月にそえて」（一七オ・二、三七一・一）

卷二の冒頭文の一節である。右大将死去（実は架空の妹と入れ替わって入内し、今は女院になっている）の後、無明長夜のごとく晴らしよくなかった人々の嘆きも、移り行く年月に従って、二人の遺児（左大臣と中宮）の世話に専念することによってすっかり慰んだという文脈である。「給」を「御」の誤写とし、踊り字「、」を衍字として校訂するのは諸注一致している。ただし、私見では、前者はその通りだと思いが、後者については、「も、」の前に「と」が脱落したと考えたい。すなわち、「御なげきども、」と校訂するわけである。右大将の死去を信じて嘆く人々はもちろん複数であるから「御なげき」を複数形にする方が合理的であるし、後の「御心のうちどもにうちかはり」の複数形とも合致するのである。

②「女はさしも、おぼしたららずや」（一七オ・10、三八一・2）

源氏入道の住む西山の邸で中務卿宮の北の方と逢った左大臣が、二度目の逢瀬の後、二人の関係が世間に漏れて噂になることを気にして思い乱れているのに対して、北の方の方はそれほどまでは世間体を気にしていないのだろうか、という記述である。なぜか諸注校訂していないけれども、語法上は「さしもおぼしたららずや」でよい。踊り字「、」は衍字と見なすべきであろう。

③「いかなればかくのみよをかりそめに思たらん」（一九ウ・2、三八八・8）

女院が左大臣に、右大臣の大君との縁談を勧めた場面で、密かに女院を慕う左大臣が涙を流して、「いかなるにか侍らん、さらにひさしくよにながらふべき物とも思給はぬに、人のためも中くなることやと、いとをしさにこそ」と自身の短命を覚悟しているようなことを言って紛らわしたのを受けて、左大臣の特異な身の上を知る女院が心配している記事である。ここも諸注校訂案を示さないが、語法的には「思（ひ）たるらん」と、原因推量の助動詞「らん」を用いるのが自然である。この直後に女院が左大臣に向かって発した言葉に、「なごかくゆ、しきことをのみきかせ給らん」とあるのは、全く同じ構文である。「る」が脱落したものと考えたい。

④「むかしいま、人の心のひくかたしことなれば、をのつからおぼす、ちなどあるにやとこそ思すべすを、かゝることにのみ口なれ

給なん心うき」(三〇オ・5、三八八・14)

同じ場面で、女院は左大臣に、短命の予感を理由に結婚しないなどと自分を卑下する必要はないと言った後でこのように言う。大槻氏はここを「昔と今では、女性に対する好みも違うでしょうから、あなたにはあなたの、自然お思いの筋などもあるのでは、とただ私は黙ってみてきましたが、そのような不吉なお考えにばかり、口ぐせになっておられることがどうも心配です」と訳しておられる。ほぼ的確な訳であると思う。ただし、「思ひすべす」の部分に関して、頭注に「黙って私(女院)はみてきたが」と記し、補注に、

古典文庫本(下、43頁)は、「おほす、ちなとあるにやとこそ、思すへすを、かゝることにおほす」とあるが、原本のまままで宜しいのではなからうか。「つきづきしう宣ひすべして出で給ひなむとす」(源氏、蓬生)。

と、『源氏物語』蓬生巻の用例を示して解かれるのにはやや問題がある。蓬生巻の用例は、諸本多く「のたまひすへして」とあるが、大島本や承応版本・『湖月抄』本には「のたまひすくして」とある。他に、若菜下巻に、「おほかたの悔りにくきあたりなれば、えしも言ひすべしたまはでおはしましそめぬ」という「言ひすべす」の用例がある(ただし「いひすぐし」とある本もある)。「すべす」か「すぐす」か問題があるが、古注以来「言ひすべす」は言い逃れをする意とされている。しかし「思ひすべす」は『源氏物語』をはじめ諸書に用例を見ず、「言ひすべす」の言い逃れをする意を「思ひ

すべす」に應用することも困難である。大槻氏が解釈されるように、この箇所が「黙ってみてきた」の意であるならば、「思ひすべす」ではなくて「思ひすぐす」であるべきであろう。「思ひすぐす」ならば、心にとめずにそのまま過ごす意、または気にはしながらもそのままにしておく意で、この場面にふさわしい。『源氏物語』夢浮橋巻に、「かばかり聞きて、なのめに思ひ過ぐすべくは思ひはべらざりし人なるを」云々とあるのが似た用例である。したがって、この箇所は、「をのづからおほす、ちなとあるにやとこそ思(ひ)すぐすを」と校訂すべきであると考える。なお、「思ひすべす」と校訂する案を示す古典文庫本の傍記は、「思す」という敬語の用法からしても不適當である。

⑤「かきもはらはぬなをしのむねに、ほろくとつらぬきをつるを御らんずるまゝに、そこはかとおぼしわかれず、我もうちこぼれさせ給」(三一オ・2、三八九・6)

これも同じ場面、女院に懇々と諭される左大臣が、心に秘めた女院への恋心からこぼれる涙をかき払うこともせず、直衣の胸にぼろぼろとふりかかる様を女院が見ていると、思わず知らず自分も涙をこぼしたという記述である。この「つらぬきをつる」が理解し難い。大槻氏は「貫き落つる」と読み、「直衣の胸にほろほるとつらぬき落ちるのを」と訳されるが、直衣の胸に涙が貫き落ちるといふのはどういふことか。直衣の胸の部分に涙がこぼれかかって、布地を通

り抜けて下に落ちるといふことだろうか。しかし、身につけている直衣に涙が浸透して通過していく様が外から見えるわけでもなから漏れるとは言っても貫き通るとは言わない。時には漏れずに溜まって月を宿したりもする。おそらく「つらぬきをつる」には誤写があるのだろうと思う。ひとつの可能性は、涙の雫が次から次へと落ちかかる意で、「つゝきをつる」とあったものが、踊り字「ゝ」が「ら」に誤写されて「つらきをつる」となり、さらに「ぬ」の誤脱と見て補入された結果「つらぬきおつる」となったという経緯である。文字のつながり方は近いが、「続き落つ」という語の用例を知らない。もうひとつの可能性は「こほれをつる」の誤写と見る考え方である。これなら、この場面の少し前にも「ほろく」とこほるゝを「二九ウ・2、三八八・8」とあるように涙がこぼれ落ちる様をそのまま表現したものとなる。「こほれ」と「つらぬき」の間には誤写が想定し難いようだが、案外「こほ連」の草体は「つらぬき」と字形が似てくるのではなからうか。決め手はないが、ここは「こほれをつる」が本来の形である可能性が大きいだろうと思う。

⑥ 「所せきあめのむつまじさ(か)にぞ、かへりたる御なをしのいろもまぎらはされける」(三二ウ・1、三八九・11)

その直後、左大臣が朱雀院の御前に出た場面である。院が近付く

足音を聞いた左大臣は、「あまりみぐるしき御なみだもそらをそろしくて、すべりいで給」うたのだが、召されて対面することになったのである。左大臣は、女院への恋心から流した涙で直衣がひどく濡れているのを見咎められるのが怖かったのだが、折からの大雨で濡れた衣を紛らわすことができたというのである。「むつまじさ」を「むつかしさ」に校訂するのは、大槻氏も集成本も同じ（古典文庫本は「マ、」と傍記するのみ）だが、「かへりたる」の部分は諸注疑いを入れない。大槻氏は「ぬれ返った直衣の色は」と訳しておられる。しかし、「かへりたる」で濡れた意を表わせるものであるうか。直衣が翻ったの意ならあり得るが、翻るのは裾であって、涙に濡れた胸のあたりは翻りようがない。それに、「かへりたる」のは直衣ではなくて「御のをしのいろ」なのである。涙に濡れて色が返ったという言い方は日本語として成り立たない。ここはどうしても「かはりたる」でなければならぬだろう。涙にぐっしり濡れて直衣の色が変わっているのを、激しい雨に濡れたせいにしてごまかしたというのである。これは「ハ」が「へ」に誤写された結果生じた誤りと考えられる。

⑦ 「この大将どのをば、うちの太とのとこそ申せや」といふを」(二六ウ・3、三九二・15)

頭中将らに誘われて宇治川のほとりに紅葉狩りに出かけた左大臣は、栗津の辺りに紛れ出て垣間見して歩く。そこで女房たちの話し

声を耳にする。この家は、かつて三位の中將（今の右大将）の愛人であった三条の女とその娘が隠れ住んでいる所であった。ひとりの女房が、大将殿が近くに逍遙に来ていたとの噂を聞いて、主人の夫である右大将ではないかと思い、忘れられた存在の女主人を思つて泣くのだが、他の若い女房が、「これは左大臣どのとこそ申なれ。もとの関白どの、御ことか」と言つたのに続けて発した言葉である。逍遙に来て居るのは左大臣殿（左大将を兼任していた）で、主人の夫であった人とは別人、その人は内大臣と申しますと言つて居るのである。しかし、この「申せや」が落ち着かない。この場合「や」は詠嘆の終助詞と解され、「こそ——已然形」の強調構文のあとにくる例としては、「すべて神の社こそ、捨てがたく、なまめかしきものなれや」（『徒然草』第二四段）などがあるが、ここの「申せや」はどうも違和感がある。大槻氏が「三条の上さまのお相手の方は、いま内大臣と申し上げねば……」と不可解な訳をしておられるのもこうした違和感ゆえであろう。ここは、直前の「これは左大臣どのとこそ申なれ」と同様に已然形の結び「申せ」で止めてよいところである。そうすると、これは「申せなといふを」の誤写ではないかと思う。左大臣が最初に聞いた女房の言葉の末尾が、「……大将どの、御をうまうし給とこそいふなりつれ」などいへば」とあるのと同じく、「……この大将どのをば、うちの太とのとこそ申せ」など、いふを」と校訂してみたいのである。

ところで、この直前の「もとの関白どの、御ことか」という言葉

は、大槻氏が「もとの関白殿の御子とか」と読まれるのに従うべきだと思ふが、「もとの関白殿」は准三后となつた太政大臣のことであり、左大臣の表向きの祖父である。孫であるはずの左大臣を「御子」と言つて居るのは、発言者の思い違いでないならば、関白が亡き息子（右大将、実は今の女院）の子左大臣を養子にしていたことを示すものであろう。

⑧「けふも院、うちとまぎれ給ことおほくて、いそぎ給える御かへりをだに、くるゝまでえみ給はず」（四一ウ・7、三九六・4）

粟津の家で三条の女の娘（のちの四条の上）と再びの逢瀬を持つた左大臣が、帰京後、公務繁忙でなかなか逢いに行けないことを嘆く場面の一節である。大槻氏は、「けふも、院、内と紛れ給ふこと多くて、急ぎ給へる御帰りをだに、暮るるまでえ見給はず」と読んで、「きょうも、左大臣は、院や宮中に参内するなど、公け事に紛れなざることが多くて、急ぎなさるお帰りでさえも、日が暮れるまで、四条の上とお逢いすることがおできでない」と訳しておられるが、前半はともかく後半が判然としない。この日左大臣は深夜まで帝に引き留められ、「日が暮れるまで」どころか、結局この夜は粟津へ逢いに行くことができなかったのである。この混乱はおそらく「くるゝまでえみ給はず」とある本文に問題があるせいである。それに、「いそぎ給える御かへりをだに」の部分も、「急ぎなさるお帰りでさえも」と訳したのでは何のことだかわからない。

思うに、「御かへり」は「御帰り」ではなく「御返り」で、粟津の女への返歌をさすのであろう。つまり後朝の歌である。男から先に送る後朝の歌を「御返り」と言ったのは、その日の有明の別れに歌を詠みあつたため、左大臣としては、その時の女の歌にさらに返歌するつもりであつたのだから。すると、「くる、までえみ給はず」は、「くる、までえし給はず」が正しい形なのではないかと思えてくる。すなわち、左大臣は朝から院や内裏での公務にとり紛れて、急いで送るつもりだつた女への返歌さえ日が暮れるまでできなかったというのだ。日が暮れてから手紙を遣つたあと、公務を終えて、さあ行こうと思うと、また帝のお召があつて、深夜まで離して貰えない。「ねひとつ」になつてやつと解放されたが、今さら行くわけにもいかず、「さらばふみをだに。いまひとたびやらざりけるよ」とわびしく思つて手紙を書くのである。「ふみをだに」のあと、集成本は読点で下に続けるが、句点で切るべきであらう。「行けないならせめて手紙なりと送らう。ゆうべ手紙を遣つてからあと、何も言つて遣らなかつたことだよ」と悔やんでいるのである。これは、「し給はず」が「ミ給はず」と誤写されて生じた誤りであらう。

⑨「ひきあぐるよりをしあけて、あしすりとかや、みどりこのねをやたてそえ給らん」（四四オ・1、三九七・12）

西山の源氏入道の隠棲地で、左大臣は偶然中務卿宮の北の方母娘と出会い、ゆくりなくも北の方と契りを交わした。その後、北の方

は夫の中務卿宮に強引に自邸に連れ帰られ、左大臣との逢瀬はかなわなくなる。激しい恋慕の情に燃える北の方からの手紙が届くが、人目を忍ぶ気持ちの強い左大臣はつれない返歌をした。それを讀んだ北の方の反応を書いた箇所である。大槻氏は、「をしあけて」を「おしあてて」と校訂して、「引き開くるより、押し当て、手足すりとかや、嬰兒の音をやたて添へ給ふらん」と讀み、「中務卿宮北の方は引き開けるや否や、自分の涙を袖に押し当てて、手足をあげいて、とかいうふうには、まるで赤子が泣きわめくように、声を立てて嘆きなざる」と訳しておられる。集成本は「ひきあぐる」を「ひきあぐる」と讀むが、これは「ひきあくる」で、左大臣から届いた手紙を開ける意と解するのが妥当であらう。そして、「をしあけて」は、集成本・古典文庫本ともに校訂しないが、大槻氏のように「おしあてて」と校訂するのがよいと考えられる。ただし、それは「自分の涙を袖に押し当てて」というよりは、袖を顔に押し当てて、あるいは手紙を顔に押し当てて、の意ととるのが正確であらう。巻一に見える「女はまさりざまにをしあて、」（巻一・一七オ・3、三一九・2）とか「ゆ、しきまでぞをしあて、せきやらせ給はぬ」（七六オ・5、三五五・4）などの表現も同様で、特に後者は女御（もとの女大將）の返歌を讀んだ帝の反応の記述で、この場面とよく似ている。

さて、「あしすりとかや」の部分である。古典文庫本は踊り字「、」に「衍字カ」と傍記するが、集成本には傍書がない。大槻氏

は前掲のごとく「手足すり」と読むが、果たして「手足すり」なる語が存在するものであろうか。「足すり」の語は、『伊勢物語』第六段の「足すりをして泣けどもかひなし」や、『平家物語』巻第三「足摺」の条でよく知られている。悲しみや怒りのために足を地に摺りつける意だとか、地団太を踏んで悔しがる様だとか、足を摺り合わせて嘆く意だとか、解釈は一定しないが、幼児がだだをこねる様に似た動作を表わす語であるようだ。『源氏物語』では、総角巻に、宇治の大君の死に遭った薫の様子を「足摺りもしつべく、人のかたくなしと見むこともおほえず」と記し、蜻蛉巻にも、浮舟の失踪を知った右近の様を「足摺りといふことをして泣くさま、若き子どものやうなり」と描写する。これらはすべて「足摺り」であつて「手足摺り」ではない。手と足を同時に摺り合わせたりすると、それは悲しみの動作というよりも滑稽にしか見えないであろう。やはりここは「足摺り」でなければならぬだろう。古典文庫本のように踊り字「、」を衍字と考えるのもよいが、先の「をしあけて」の誤写と併せて考えると、「をしあけて」の「け」を衍字と見、「をしあて、あしすりとかや」を本来の形とするのがよいのではないかと思ふ。

⑩「ありしよりけなる物思ひそひて、あけるめなき御なみだなれど」
(四七ウ・7、四〇〇・2)

左大臣が右大臣の大君と結婚したことを知った三条の女が、娘の

四条の君のことを思つて嘆く場面である。諸注疑問を呈していないけれども、「あけるめなき御なみだ」がよくわからない。「あけるめなき」とはどういうことか。「開ける目なき」か。涙で目が開けられないような状態をいうにしても妙な表現で、それなら「あくるめなき」とあるべきだろう。大槻氏は「夜の明けぬような、常に心は闇の涙であるけれども」と訳され、「明ける目なき」と解釈されているようだが、それでも語法上は「明くる目なき」でなければならぬ。ここには必ずや誤写が存在しているであろう。「あくるよなき」であれば大槻氏の解釈のような意味になりそうだが、それでも「あくるよなき御なみだ」ではどこか言葉足らずな感が否めない。そこで、いささか大胆な誤写想定だが、文意が最も通りやすいのは、「あけくれひまなき御なみだ」であろうと思う。何かの錯誤で「くれひま」が「るめ」と誤写されたことになるのだが、例えば「暮暇」と漢字で書かれていたくずし字が変体仮名「累免」と誤読されたというようなこともないとは言えなからうと思ふのである。

⑪「みちのほとり、かぜさ^(ま)せさへいみじくふきて、さらにめもみえず」
(五一ウ・2、四〇二・13)

左大臣は、物の怪に悩む身重の中宮の祈禱要請のため、横川の聖を迎えに行く。聖には下山を断られるが、左大臣は山での祈禱を頼んで帰途につく。その時、折からの雪がいつそう激しく吹雪になつて難儀するという場面である。「みちのほとりかせさせさへ」とい

う部分には間違いなく誤写があるので、諸注校訂案を示している。

集成本は掲出のように「かせさせ」と読んで「さ」を「ま」の誤写と考え、「道のほとり、風交ぜさへいみじく吹きて」と解釈する。

「風交ぜ」は雨や雪に風がまじって吹くことをいう歌語だが、「風まぜに雪はふりつつしかすがに霞たなびきはるは来にけり」（『新古今集』巻一・春上・八・よみ人しらず）、「春べとはおもふものから風まぜにみ雪ちる日はいともさむけし」（『風雅集』巻一・春上・三八・伏見院御歌）、「風まぜにみ雪ふりしく山ざとのあさのさごろもいかにさゆらん」（『新千載集』巻十六・雑上・一八二九・平泰時朝臣）、「時雨れてぞ中中はるる風まぜに木のはふるよの山のはの月」（『新拾遺集』巻六・冬・六三五・左近中将善成）、「かせまぜにむらさめふりてかたをかのならのはがくれをしかなくなり」（『万代集』巻五・秋下・一〇九三・朝恵法師）、「みやこいでてあさこえゆけばかせまぜにゆきふりむかふころもかせやま」（同・巻十七・雑四・三三五八・俊恵法師）などの例から明らかのように、「風まぜに——雪（木の葉）降る」というような形で用いられる語である。したがって、「さ」と「ま（万）」の誤写は想定しやすいけれども、「風まぜさへ吹く」という言い方は成立し難いと言わざるを得ないのである。

古典文庫本には、「みちのほとり、かせさせさへ、いみしくふきて」とあり、「させ」を「ゆき」の誤写かとしている。つまり「風雪さへいみじく吹きて」と考えるわけだが、「風雪吹く」という言

い方が成り立つかどうか疑問である。大槻氏は、「道の程にも、風さへいみじく吹きて」とし、「みちのほとり」を「に」の誤写と見て改め、さらに「も」を補う。「かせさせさへいみしく」を衍字と見て抹消する（傍線大槻氏）と三箇所校訂された。これも一案ではあるが、誤写想定が複雑である。私見では、大槻説をやや簡略化して、「させ」は衍字、「ほとり」の「り（里）」を「雪」の誤写であると考えたい。すなわち、「道の程、雪、風さへいみじく吹きて」が本来の形だろうと思うのである。雪と風を並べるのは、すぐ後に「ゆきかせさらやまねば」という表現があることによる。

⑫ 「むかしかう三位どのにさぶらひししもつかえだつ物ども」（六〇ウ・三、四〇八・五）

四条の家に通う左大臣に関心を持つ内大臣に、「むかしよりつかひならし給えるさぶらひ」が情報を提供する場面である。それは、昔三位殿に仕えていた下仕えめいた者が、左大臣の通っている四条の家に出入りしているという耳寄りな情報であった。「三位どの」はかつて三位中将であった内大臣のことを言うらしい。が、その前の「かう」が不明である。古典文庫本はここに「マ、」と傍記する。大槻氏は「から」と改め、「昔から」と校訂する。しかしながら、「昔から」では、昔から今までの意になり、「さぶらひし」という過去の助動詞と合致しない。集成本には注記がないので、「かう」のまま「かく」の音便形とでも解するのであろうか。私見によれば、

この「かう」は「とう」ないし「たう」の誤写で、「藤三位殿に候ひし」が本来の形なのではないかと思う。「藤三位殿」はすなわち内大臣のことで、彼は関白右大臣の息であるから当然藤原氏である。「三位」は何人もいるので、彼は「藤三位殿」と呼ばれて区別されていたと考えるのである。「むかしよりつかひならし給えるさぶらひ」が面と向かって言う呼称としてはやや他人行儀な感はあるが、そういう表現は可能であろうと思う。

⑬「さぶらふ人々の心まで、はゆく、さだすぎつゝましきことを、いとゞおぼしほれて、さらにとけぬ御けしきなり」(六三ウ・5、四一〇・3)

久しぶりにかつての夫内大臣と再会した三条の女が、さだ過ぎた自分を恥じてなかなか打ち解けないさまを記述した箇所である。三条の女は三十代後半あたりの年齢であろうか、かつて三位中将に愛された頃の若さがなくなつたことで、内大臣の従者の心中を思つてまでも恥ずかしく、ますます「おぼしほれ」という。この「おぼしほれて」は「思し惚る」であろうから、思い詰めてほんやりする、あるいは放心する意となる。しかしながら、いくら盛りを過ぎてしまつたことが恥ずかしくとも放心してしまつたというのはいかがであるろうか。ここは遠慮して積極的になれない、気弱なそぶりをいう表現であるべきではなからうか。

思うに、「おぼしほれて」は、実は「おぼし、ほれて」の誤写で、

「思し萎れて」、すなわち気がめいつて元気が出ない様を言ったものではないか。つまり、踊り字「、」が誤脱したと考えるのである。「思ひ萎る」の語は、巻一に、死去と公表された右大将を偲んで嘆く隨身たちの様子を描いた「したしくつかふまつりし御ずいじんのをのこどもなど、かなし、いみじとのみ思しをれわたるを」(八〇ウ・5、三五七・16)云々という用例がある。

巻 三

①「かゝる御やまひどもに、なべてのよ、しづ心なくさはぎしほどに、ごけい、まつりなども、たゞこのもとはえなくてすぎゆく」(二三ウ・6、四一九・5)

中務卿宮北の方の生霊のため、右大臣の大君と四条の上はともに病に苦しむが、調伏にあい、北の方の死去に伴つて回復に向かう。こうした病氣騒ぎのため世間が落ち着くことなく騒然としているうちに、斎院の御禊や賀茂祭なども、何の見栄えもなく過ぎて行つた、ということを書いていようだが、「ことのもと」がひつかかる。大槻氏は「本来そうあるべきことが」と注されるが、納得し難い。「事の本」は、ものごとの由緒・由来、または昔からの習慣の意で用いられる語であるから、ただ由緒ある行事というだけで、の意であるろうか。それならば、「ことのもとにて」とか「ことのもととて」とでもありたいところであるから、「にて」や「とて」の脱落と考えるのも一案だが、それでも「ことのもと」自体がどうも落ち着か

ない。ここに誤写があるのではないかと思う。

例えば、「ものごとくに」とあったのが「ことのもと」と誤写されたということは考えられないだろうか。「こと」と「も」は字形が似ており、しばしば誤写される。誤写された結果「こと」と「も」が入れ替わり、さらに「に」が「と」に誤って生じた本文なのではないかと思うのである。「ものごとくに」であれば、御禊や祭など華やかな行事をはじめとして、何事も見栄えせず過ぎて行ったということで、文脈がよく通じるのである。

②「いみじうよはげなる御けしきをみたまつるをて、ひをいとあかうとりよせられたれば」（四ウ・4、四一九・14）

臨月を迎えて母屋から廂に移った中宮の顔を、真実の父である内大臣が見て確かめる場面である。ひどく弱々しげな中宮の様子を看ようと世話係の女房が灯火を近づけたため、奥行きのない廂の間なので内大臣の目に中宮の顔がはっきり見えたというのである。「みたまつるをて」の部分は、大槻氏も「……とて」と校訂する。古典文庫本は「みたまつらせて」の誤写かと傍記するが、「とて」案の方がよいであろう。ここで問題にしたいのは、その後の「ひをいとあかうとりよせられたれば」の部分である。諸注疑問を呈する箇所ではないが、「あかう」が気になる。大槻氏は「明かう」と読み、「灯を大麥明るく取り寄せて」と訳すが、「明かう取り寄す」という言い方は不自然ではないか。近く取り寄せた結果明るくなるのであ

ろう。したがって、ここは「ちかうとりよせられたれば」とあるべきである。「ち」が「あ」に誤写されたのだ。『源氏物語』にも、若菜上巻に、「灯近くとり寄せて、この文を見たまふに、げにせきとめむ方ぞなかりける」とあり、また横笛巻に、「上も御殿油近く取り寄せさせたまで、耳はさみしてそそくりつくるひて、抱きてゐたまへり」、夕霧巻に、「かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近く取り寄せて見たまふ」などとあるのが参考になるであろう。なお、この校訂案は、広島大学大学院の演習における岡陽子君の発案であることを記しておく。

③「あまうゑはよろづをしとられたてまつりて、わが御みゆかしうおぼさるれば、ひるはさしいで給はず」（七ウ・10、四二二・16）

中宮が無事第一皇子を出産し、喜びにわく太政大臣邸では、盛大に産養いが催される。七日の間は女院も太政大臣邸に留まり、いっそう賑やかである。そんな中で、この邸に住む尼上、すなわち対の上は、祝儀の場に墨染の出家姿の身は縁起でもないと思われるので、昼間は遠慮して表に出ず、夜になるとわずかに顔を出すというのである。「ゆかしう」が「ゆ、しう」の誤写であるのは、集成本と大槻氏が校訂される通りであろう。同様の誤写は他の箇所にも見られ、例えば、卷一の「よと、もにあやうくゆかしくのみおほしたる御けはひを」（六〇オ・5、三四五・8）も、諸注校訂案の指摘はないけれども、ここと同様「ゆ、しく」の誤写と考えられる。

ところで、問題は「よろづをしとられたてまつりて」の部分である。大槻氏はここに「中宮から、むりやり部屋を全部とられなされて」と注しておられるのだが、いくら盛大な産養いのためとは言え、広い太政大臣邸で、娘の中宮が出家した母の部屋を全部取り上げてしまつて母は居場所がなくなつたというのはいかかなものだろうか。『落窪物語』巻三に、「天下の親にて、おのが家おし取らるる人やある」とあるように、「をしとられ」の本文に従う限りは無理に奪われる意に取らざるを得ない。おそらくここには誤写があるのであろう。思うに、もともとは「おしけたれたてまつりて」とあつたのではないであろうか。「けた（介多）」が「とら（止良）」に誤写されたと考えるわけである。出家して静かに暮らしていた尼上は、中宮の出産祝いでごつたがえす邸内の賑やかさにあらゆる点で圧倒されてしまつたというのである。『源氏物語』濔標巻に、「春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを」云々とある類である。

④ 「けふぞ女院かへらせ給て、おぼしをきてたる」（八ウ・5、四二二・7）

皇子が誕生して八日目、一連の産養いが終わつて、この日女院が帰る予定になつていふと言ふ。集成本は疑問を示さないが、「かへらせ給て、おぼしをきてたる」は、落ち着かない表現である。大槻氏は「給」の後に「と」が誤脱していると見て、「帰らせ給ふとて、

思し掟てたる」と校訂されている。古典文庫本には「女院かへらせ給て、おほし（マ）をきてたる」と傍記があるが、校訂の意図は不明である。大槻氏の校訂でもよさそうだが、それよりもむしろ、「て」を「へく」の誤写と見て、「女院かへらせ給べく、おぼしをきてたる」が本来の形であると考えたい。「へく」と「て（天）」は字形が相似していて誤写しやすしいし、これより少し後に、「院へまかでさせ給べくおほしめしをきてさせ給べし」（二二オ・7、四二四・11）という類似表現があるのも参考になろう。

⑤ 「権中納言、三位の中將など、とらへたてまつりて、まどろひいで給」（二二オ・8、四二九・11）

内大臣が亡くなり、その臨終を看取つて悲しみにくれる父関白が「あしをそらにてよろほい、で給ほど、御くるまにもえたてまつらず」というありさまなので、子息の権中納言や三位中將らが腕をつかんで、支えられながら出て行つたというのである。この「まどろひいで給」という箇所は、諸注疑問を提示していないけれども、意味不明である。大槻氏は、ここを「関白はまどろひい出なざる」と、そのままに訳しておられるが、「まどろふ」という動詞は辞書に見えない語である。誤写があると考えざるを得ないだろう。

そこで、「まどろひ出づ」では意味不明だが、「まどろひ出づ」でも「まろび出づ」でも通じることには注意したい。これはおそらく、「ま」とひいて給」の「と」の右に「ろ」と異文注記されていたものが誤

って本文に取り込まれて「まろひいて給」となったものか、あるいは逆に「まろひいて給」の「ろ」の右に「と」と注記されていたものが本文化したものであるが、より可能性が高いのは前者だろうと思う。

⑥「こよひうちいでんにつゝましければ、なつかしうかたらひよりて、すべりいづるもいとはしたなくおぼさるゝ心のをに、かたはらいたくて、やをらまかで給えるに」（三五ウ・9、四三八・12）

左大臣は、かつて自分と縁談があったのに実現しなかった関白の姫君（実は左大臣の異母姉、今は東宮に入内して宣耀殿の女御となっている）に恋心を抱き、東宮御所に立ち寄って宣耀殿を窺う。そこで偶然出会った女房の少将と語り、契りを交わすのだが、本来の目的である女御への手引きの依頼を今口にするのはさすがに憚られて、睦言を交わしただけで少将のもとをすべり出るといふきまりの悪い仕儀となった。さて、「心のをに、かたはらいたくて、やをらまかで給えるに」という部分は、本当は恋しい女御に逢いたいのに行きがかり少将と契ってしまったという良心の呵責から少将を気の毒に思つてそつと出て行つたというのであり、文脈上「心のをに、」とあるべきところである。集成本は校訂案を示さないが、古典文庫本が「に脱カ」と傍記するように、踊り字「、」が脱落したものと考へたい。大槻氏は、「心の鬼は」と校訂されるが、「に」の方がよいであろう。巻二にも「いとゞしらまほしけれど、あまりと

はんも心のをにあひなくて、いひまぎらはし給ぬ」（六オ・6、三七四・2）と同様の表現があるが、大槻氏はそこでは「心の鬼に」と「に」を補つて校訂されているのである。

⑦「をなじ女御、宮す所ときこゆれど、あながちに宮に思ひつき、こえ給える御よはひ、はたいとはるかにまさり給へり」（三七ウ・7、四三九・15）

再び宣耀殿に紛れ入つた左大臣は、女御に迫るが、女御は衣をひきかぶつて床の下にすべり降りたりして許さないのであえなく失敗する。ここは、氣丈に操を守つた女御を、姉の対の上と比較して賞賛している草子地の一部である。姉君はひどく心が幼かつたからか、義父左大将や義理の兄三位の中將と間違ひを冒した。しかし、妹の女御はしかるべき節々にはとてもよく分別を弁えている人だと言つて、掲出の文辞になる。ここを大槻氏は、「同じ女御、御息所と申し上げるけれども、一途に東宮をお慕ひ申し上げておられたお齡のほどは、東宮に比べても大層のことまさつておられたのであつた」と訳されるが、「お齡のほどは」以下が何のことやらわからない。確かに、すぐ後の文中に、「みやにはな、とせばかりかこのかみにてをはする」とあつて、女御は東宮より七歳ほど年上であつたといふ。しかしながら、ここで問題にしているのは東宮との年齢差ではなく、他の女御や御息所たちに比べて、宣耀殿の女御が遙かに一途に東宮を慕う気持ちが強かつたということであるはずである。

おそらく「御よはひ」というところに誤写があるのであろう。推測するに、ここは「御けはひ」が正しい形なのではなからうか。同じ女御や御息所と言っても、宣耀殿の女御は「あながちに宮（東宮）に思ひつき、こえ給える御けはひ」がとても遙かにまさっていたというのであろう。「け」が「よ」に誤写された結果、遙かに姉さん女房であることを強調したかのように誤解してしまったのである。

⑧ 「かたへはをいの御、おなじことにや」（四二オ・9、四四二・13）

大堰に隠棲する入道太政大臣が病床に臥し、孫にあたる帝が見舞いのため行幸する。帝が帰ったあと入道は、国母である「女院の御宿世」を繰り返し口にし、「いまはたゞごらくのむかへはなちては、まつことなきを、猶いかであすの行けいまで」（集成本は「猶以下を太政大臣の発言とするが、私に改めた」と、もはや極楽からの迎えを待つ以外には思い残すことはないのだが、やはり明日の東宮の行啓を迎えるまでは生きていたいと言い、「心ぎたなし」と草子地で批評されている。この入道の言葉の前に「かたへはをいの御、おなじことにや」とあるのである。諸注校訂案を示さないが、「をいの御」がわかりにくい。「御」の後には名詞が省略されていると考えることもできるが、やはり何か脱落があるのだらう。「おなじことにや」は、大槻氏が指摘されるように、「老いぬればおなじ事

こそせられけれきみはちよませきみはちよませ」（『拾遺集』巻五・賀・二七一・源順）を引歌としており、老人が同じことを繰り返して言ったりしたりすることをさす。ここでは「こと」は「言」で、同じことばかり口にすることを言うようだ。すると、「をいの御」は、齢をとったせいで、とでもいう意味にならうから、「御」の後には「け（故）」あたりが脱落していると考えられるのではないかと思う。女院の宿世を讃える一方では、齢のせい、今はこの世に未練はないが明日の行啓までは生きていたいと、何度も同じことを繰り返して言うと言っているのである。

⑨ 「御いのり・どのしるしにや、廿日ごろよりをどろくしくなやませ給事なく、いとしづかながらはてさせ給ぬ」（四五オ・9、四四四・10）

手を尽くした祈禱のおかげか、太政大臣はひどく苦しむこともなく大往生したと言う。ここで「御いのりとのしるしにや」とある原文には明らかに誤脱があるので、集成本は「な」を補って、「御いのりなどのしるしにや」と校訂している。古典文庫本も「な脱力」と傍記し、大槻氏も同様に「御祈りなどのしるしにや」と校訂しておられる。それで問題ないと思うが、私見ではあえて別案を提示したい。それは、「と」の後に「も」が脱落したと見て、「御いのりどのしるしにや」と校訂する案である。さまざまな祈禱が行なわれたであろうから、「御いのりども」と複数形であるのはむしろ自然

である。同じ巻三に、「さまぐの御いのりどもものしるしにや、さすがにやうくをこたりあひ給へれば」（三ウ・4、四一九・4）とあるのが参考になる。もちろん「など」の用例もあるのであつて、巻二に、「さのみおほされば、いのりなどをこそかさねてもせさせ給はめ」（三〇オ・2、三八八・13）というような記事が見える。

おわりに

本稿では、『在明の別』の巻二において十三箇所、巻三において九箇所、合計二十二箇所の本文存疑箇所に関して校訂案を提出してみた。前稿巻一の二十四箇所と併せて、四十六箇所になる。これらはいずれも推測による試案に過ぎず、ただちに本文を改訂すべきだとまで主張するつもりはない。たとえ本物語のように現存伝本が孤本であつても、その本文を極力尊重すべきであるのは当然である。しかしながら、一方で伝流過程において少なからず損傷が生じていることも明らかなのであるから、現存本の本文に拘泥するあまりに、いかにも不自然な解釈に陥ってしまうことがよいとも思えない。本来のあるべき本文の追究は、ある程度納得できる誤写過程の想定を阻むものではないと思う。そのような試みが多くの研究者によってなされることにより、相互に吟味・批判されてより蓋然性の高い本文批評が確立していくだろうと考えるので、あえて私見を提示してみた次第である。

Notes on the Textual Collations of the Tale of Aubade, *Ariake-no-Wakare*:

— Vols.2 and 3 of the Tale —

Yoshinobu SENO

The Tale of Aubade, *Ariake-no-wakare*, which was written at the end of Heian Era, has its only extant copy deposited at the library of Tenri University. Since the transcription was made in the middle of the Edo Period, it is full of errors.

This paper is, therefore, an attempt to explore the textual collations of the tale in question, dealing with its second and third volumes. The first volume was published in *The Hiroshima University Studies, Faculty of Letters*, Vol.58 (1998).